

「イースター、おめでとう」

2021年04月05日

イースター、おめでとうございます。コロナの感染防止のため礼拝を休み、家で聖書を読み祈る、また、ユーチューブを通しての説教を聴く主の日であったが、イースターには横浜本郷台教会に数週間ぶりに行った。礼拝堂で祈り、み言葉を聞くことは嬉しいことである。一組のご夫妻が転入会され、礼拝後、歓迎の茶話会が持たれた。私たちは、教会員が作られたクッキーをいただいて帰った。コロナは教会の礼拝、集会のあり方を寂しいものにした。思い切り賛美できるように、コロナの終息を心から願う。

主イエスの復活がキリスト教信仰の核心である。復活のメッセージが代々に亘って教会を生かし続けてきた。ところが、死者の復活などはありませんことなので、復活はどういうことで、復活信仰はどのような信仰なのか、戸惑いがある。私の復活信仰を告白したい。

キリストの復活に関して、50年代にパウロが書いたIコリント書15章に力強く記されている。新約聖書の中で、最初の復活証言で、下記のように書いている。キリストは死者の中から復活し、ケファ（ペトロ）をはじめ、多くの人々に現れ、「月足らずで生まれたような私にまで現れました（Iコリント15:8）」と、復活の事実を証言している。そして、「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお罪の中にいることとなります（同上17節）」と述べ、「アダムにあってすべての人が死ぬことになったように、キリストにあってすべての人が生かされることになるのです（同上22節）」と、キリストの復活によって罪が赦され、生かされる者になったと力説している。

それでは、復活の体はどのようなものかという問いが起きてくる。死者の復活は、「朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに復活し、卑しいもので蒔かれ、栄光のあるものに復活し、弱いもので蒔かれ、力あるものに復活し、自然の体で蒔かれ、霊の体で復活します。自然の体があるのですから、霊の体もあるのです（同上42節b~44節）」と書いている。また、「肉と血は神の国を受け継ぐことはできません。また、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐこともありません（同上50節b）」とも書いている。キリストの復活は朽ちる肉と血の体の復活ではなく、栄光の霊の体の復活である。それでは、霊の体とは何であるのか。霊とは、神から送られてくる神と人とを結びつける力で、これは、見えないものを信じる信仰において、認識できるものである。だから、キリストの復活は目で見、手で触れられるようなことではなく、信仰において、キリストは復活し、私たちと共にいてくださることを承認することである。これは、私の思い込みではなく、神ご自身が承認へと導いてくださる秘儀である。そして、復活信仰は、この世の生活を虚無的なこととして捉えず、全ての労苦が神に対して有効な業として働くものとされる。罪赦され、神の命に与る確かさを得させられることである。復活のキリストに出会ったペトロやパウロは見事な生まれ変わりをしている。地上において、死を突き抜けた永遠に触れる命を得たからである。

初代教会の弟子たちは、霊においてキリストとまみえた。福音書は、それを可視的に描いている。キリストとまみえた喜びを可視的に描き、復活の事実を証言したのである。そして、その信仰は、キリストの愛に倣うものとし、キリストの愛に溢れた教会形成を生んでいった。代々の教会のキリスト者たちも、弟子たちと同じ体験をし、復活日を喜び、祝い、キリスト教を継承してきた。私も、自分を受け入れられず、世の虚しさで、生きる意味を見出せなかったが、死から命に復活したキリストのゆえに、生きられる、生きて良いとの福音を聞いた。キリストの復活の命に与って、私自身を保つ救いを得て来た。